

論文の和文要旨	
論文題目	日越間ビジネス通訳における職業規範
氏名	TRAN THI MY (チャン・ティ・ミー)
<p>Gideon Toury は、翻訳規範を「何が正しいか間違っているか、何が適切か不適切かについて、あるコミュニティ内で共有されている一般的な価値や志向であり、特定の状況によって適正で適用可能な行為の指針 (Toury 1978 : 83-84)」と定義し、訳出そのもの (textual) および訳出以外のテキスト (extra-textual) という 2 つのデータ源から抽出できるとしている (Toury 1978 : 91)。Andrew Chesterman は、Toury による翻訳規範の概念を踏襲し、期待規範 (expectancy norms) および職業規範 (professional norms) という 2 つの上位規範から成り立っている翻訳規範モデルを提案している (Chesterman 1997 : 64-70)。期待規範は翻訳プロダクトがどのようなものであるべきかという翻訳の受け手の期待の集合である。職業規範は、期待規範を満足させる目的で翻訳者が用いるストラテジーを含む翻訳プロセスに関する規範であり、期待規範によって規定される。職業規範はさらに責任規範 (accountability norms)、コミュニケーション規範 (communication norms)、関係規範 (relation norms) の 3 つに分けられる。</p> <p>本研究では、11 名の日越間ビジネス通訳者をインフォーマントとして半構造化インタビューおよび通訳場面のシミュレーションを行い、インタビュー・データから通訳者の規範意識を抽出したうえで、その規範意識は通訳者による訳出にどのように反映されているかをシミュレーション・データで検証し、日越間ビジネス通訳における職業規範の実態を解明する。</p> <p>本論文は 8 章から構成されている。第 1 章では、本研究の背景、目的、意義を述べたのち、本論文の構成を示す。第 2 章では、本論文において分析に用いる概念を説明する。第 3 章では、Toury (1995) と Chesterman (1997) の翻訳規範モデルの内容、規範を抽出するために利用可能なデータ源、規範の記述に有効な装置について述べ、翻訳規範および通訳規範に関する先行研究を概観したうえで、本研究の位置づけを示す。第 4 章では、インタビュー・データおよびシミュレーション・データの収集・分析の方法を詳述する。第 5 章ではインタビュー・データの分析結果を、第 6 章ではシミュレーション・データの分析結果を示す。第 7 章では、インタビュー・データおよびシミュレーション・データの分析から導き出された結果を振り返り、考察する。第 8 章では、結論を述べたうえで、本研究の限界、今後の課題と展望について言及する。</p> <p>インタビュー・データを分析した結果、責任規範意識として「入念な仕事ぶり」、「権力</p>	

行使の自制」と「依頼者を裏切らない立場」の3つ、コミュニケーション規範意識として「コミュニケーションの流れの円滑化」、「相互理解の促進」および「良き人間関係の構築・維持」の3つ、関係規範意識として「意味的類似性優先」が浮き彫りになった。シミュレーション・データを分析した結果、この7つの職業規範意識はいずれも守られていることが明らかになった。従って、この7つは規範意識に留まらず、日越間ビジネス通訳における職業規範として位置付ける。インタビュー・データおよびシミュレーション・データの分析結果を統合して7つの職業規範を以下のように定義する。

「入念な仕事ぶり」とは、責任規範の一つであり、通訳者が業務に対して常に慎重な姿勢を持ち、注意深い態度を表すべきだという規範である。この中には、通訳者が業務を遂行する際に十分な通訳パフォーマンスを発揮できるように事前に情報の収集、関連用語の確認をしておき、通訳中に発言内容を正確に訳すために記憶の補助としてのノート・テイキング、話し手に対して説明の要求を行い、事後に業務の遂行中に出てきた新しい単語や分からなかった用語などを調べて用語集を作成・追記するなどの作業が考えられる。

「権力行使の自制」とは、責任規範の一つであり、コミュニケーションの手段を独占し、操作するという通訳者特有の権力を行使することが会話当事者の主体性を阻害してしまう行為にならないように自制すべきだという規範である。この中には、通訳者が業務を遂行する際に仲介の範囲を設定し、会話当事者の意思を尊重し、通訳者自身の感情を訳出に反映させないようにするなどが考えられる。

「依頼者を裏切らない立場」とは、責任規範の一つであり、通訳者が業務を遂行する際、中立的な立場、あるいは依頼者寄りの立場をとるべきだという規範である。この中には、依頼者寄りの立場をとる際、通訳者自身が依頼者側の一員であることを表明したり、依頼者の利益を維持・拡大するために提案したり、依頼者の目的達成のために表現を工夫したりするなどが考えられる。

「コミュニケーションの流れの円滑化」とは、コミュニケーション規範の一つであり、コミュニケーションが捗るように促進すべきだという規範である。この中には、通訳者が状況に応じてファシリテイトしたり、冗語および視覚情報だけで理解し得る発話文の訳出を省略したり、会話の流れの中にすでに出てきた情報について会話当事者の代弁をしたりするなどが考えられる。

「相互理解の促進」とは、コミュニケーション規範の一つであり、会話当事者が互いに理解を得ること、認識を共有することを促し、誤解が生じないように努めるべきだという規範である。この中には、通訳者が元の発言を要約したり、前置きを適宜追加した

り、会話当事者に対して補足説明したり、提案したりするなどが考えられる。

「良き人間関係の構築・維持」とは、コミュニケーション規範の一つであり、通訳者は会話当事者の間、あるいは通訳者自身と会話当事者との間に信頼感、親近感、和やかな雰囲気を作り出し、維持できるように努めるべきだという規範である。この中には、話し手に対して聞き手が好む話題を提案したり、聞き手の気分を害する恐れがある発言を修正・撤回するように勧めたり、罵詈雑言の度合い、前置きの長さ、誉め言葉の度合いを調節したり、親近感を感じさせる人称代名詞を使用したりする他に、決まり文句などを追加することで会話当事者に対して自分の能力を示すなどが考えられる。

「意味的類似性優先」とは、関係規範であり、形式的類似性、文体的類似性、効果の類似性の3つより意味的類似性を優先すべきだという規範である。この中には、通訳者による各種の仲介によってSTとTTが別物にならないよう仲介の範囲を設定し、意識しながら業務を遂行する、誤訳に気づいたら正しく直すなどが考えられる。

また、規範同士に矛盾が生じる場合、通訳者はどの規範を優先するか、どの規範を破るかを個々の場面に応じて決めていることと、規範同士が相互に作用することも本研究の分析・考察で明らかになった。

さらに、Chesterman (1997: 92-112) による30種類のストラテジーだけでは、通訳者が採用したプロセスおよびそこに作用している規範を指し示すのに不十分であることも本研究のインタビュー・データとシミュレーション・データの分析・考察の結果から示された。通訳者が規範に従おうとして講じる方法は、Chesterman (1997: 92-112) による統語論的・文法的ストラテジー、意味論的ストラテジーと語用論的ストラテジーの30種類以外に、発言内容についての説明の要求、提案、ファシリテイトおよび会話当事者の代弁という4つのストラテジーからなる「通訳者役割論的ストラテジー」と、事前準備、事後の振り返りおよびノート・テイキングという3つの作業からなる「通訳特有の作業」が加わることが本研究から明らかとなった。そして、1つのストラテジー、または1つの作業が異なる規範に従うために用いられると同時に、1つの規範を遵守するために複数のストラテジー、あるいは作業が行われていることも分かった。

通訳者が業務を遂行するにあたり、直訳を採用しない要因として、①通訳プロセスに対する規範の作用、②日本語とベトナム語の言語体系の違い、③通訳プロセスの特徴の3つが考えられる。

本研究の限界として、11名の通訳者全員がベトナム語母語話者に限られているというインフォーマントの面が挙げられる。また、データ源およびシミュレーション実施の方法

に関する方法論上の限界もある。本研究では、日越通訳を介したビジネス場面をリアルに再現するために、通訳の方式、通訳者の雇用形態、通訳者と依頼者との関係、会話の内容、会話が行われる状況という 5 つの項目を念入りに検討したうえで、シミュレーションの場面を設定した。しかし、データの妥当性の観点から考えると、データ源としてシミュレーション・データよりビジネスの現場での会話の方が望ましい。さらに、シミュレーションを連続して行うことによって生じる持ち越し効果を最小限に抑えるために、場面①と場面②の間を 2 週間以上空け、シナリオにおける数字を異なるものに設定するなど工夫したが、完全に防げたとは言えない。

今後の課題として、日越間ビジネス通訳における期待規範の研究が挙げられる。また、日越間ビジネス通訳における期待規範および職業規範には、日英、日中、越英や越日などの組合せに共通する部分と日越特有の部分があると考えられる。言語、文化および商習慣の視座からその異同を明らかにしていくことも今後の課題の 1 つである。

本研究の展望として、本研究によって、これまで研究されていない日越間ビジネス通訳における職業規範が明らかにされるとともに、規範研究におけるデータ源として訳出そのものおよび訳出以外のテキストの両方を活用することの重要性が認識されるきっかけになると考える。さらに、将来的には通訳者の養成プログラム開発研究やビジネス通訳分野独自の倫理規定やガイドラインの制定にも大きく貢献できると考える。